

# 今物語における希望表現について

柴田 昭二  
連 仲友

## 目次

- 一、はじめに
  - 二、希望表現の構成形式
  - 三、各形式の用法
  - 四、おわりに
- 一、はじめに

本稿は、別稿<sup>①</sup>を受け、今物語を研究資料として、それにおける希望表現<sup>②</sup>の実態を解明しようとするものである。

今物語の編者および成立については諸説があるが、『日本古典文学大辞典』<sup>③</sup>によると、藤原信実の編、暦仁二年（一二三九）から仁治元年（一二四〇）までの間に成立したと推定される。現存本は一冊で、五三編の短小な説話を収める。おおむね平安後期・鎌倉前期の説話に材を取り、淡々とした和文体を基調とし、若干の悲恋遁世説話において和漢の詩歌を織り込んだ美辞麗句をつらねる。文体については、「伊勢物語」に代表される平安時代の歌物語を思い出させる。素材は先行書からの抄録によらず、すべて口承のものかとされる。伝本は宮内庁書陵部・内閣

今物語における希望表現について

文庫その他に二十余種の写本が伝わり、版本として天明六年（一七八六）刊・文化十年（一八一三）刊・群書類従本があるが、大きな差異は認められない、とされている。

テキストには、久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江校注『今物語』<sup>④</sup>を用いる。その底本は、宮内庁書陵部蔵写本である。テキストの「凡例」によれば、翻字にあたって歴史的仮名遣いに改めた部分には振り仮名を付し、濁点、句読点および引用符を用いた、とする。

## 二、希望表現の構成形式

今物語（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式と用例数は以下の通りである。

「ソントオボス」	（二例）
「ソントス」	（二例）
「タマヘ」	（二例）
「望ム」	（二例）
「祈ル」	（三例）

「ム」 (二例)

「マウシ」 (二例)

「タシ」 (二例)

「バヤ」 (二例)

「ナン」 (二例)

本書における希望表現は、その構成形式が大きく慣用形「ソントオボス」「ソムトス」「タマヘ」、実動詞「望ム」「祈ル」、付属語「ム」「マウシ」「タシ」「バヤ」「ナン」という三つの類型に分類でき、その種類がこれまで考察してきた説話文学資料におけるそれと比較するとかなり少ない。また、各構成形式の用例数も少ない。したがって、本書における希望表現の構成が単純なものであると指摘できる。その理由については、口承の説話を同一人のまとめたことともに、本書の分量が挙げられる。本書は五三編の短小な説話で成り、少ない分量に希望表現が現れる用例も必然的に下がる。また、本書の内容とも関係があると考えられる。本書には仏教関係の説話が部分的に見られる程度であり多くないため、神仏に対する願いや祈りの表現が少なくなる。それに、本書の文体的要素も原因になると思われる。本書は和文体であり、その希望表現も和文体のもののみが用いられ、漢文訓読体に多く見られる「ネガハクハ」などが現れない。しかし、今まで考察してきた説話関係の諸文献と比べ、「タシ」の存在が一つの特徴と言えよう。本書は願望の助動詞「マホシ」が見られずに、「タシ」が用いられていることは、成立時期とも関係があるかと思われる。

## 三、各形式の用法

## 1、「ソントオボス」「ソムトス」「タマヘ」の用法

まず、「ソントオボス」の用法を見よう。

本書には、希望表現と認められる慣用形式「ソントオボス」が一例のみ見られる。

(1) ちときこしめして、いかで御覽せむとおぼしけるま、に、にはかにおしいらせたまひけり。(五 一二六頁)

例(1)は、主体が明らかではないが、「御つほね」でのことであり、敬語表現で、「お気づきになり、どうにかして御覧になりたいと思いいなる御心にまかせて、」の意と解され、第三人称の「願望」<sup>(5)</sup>を「説明」<sup>(6)</sup>する用法である。

次に、「ソムトス」の用法を見よう。

本書には、希望表現と関連性を持つ「ソムトス」が二例認められる。

「ソムトス」は慣用形式であり、本来「将然」を表す用法に属するが、その中でも有情物の「将然」を表す用法は、希望表現に極めて近いものがある。

(2) そののちこの女たづねゆかむとしけれど、ち、は、ありけるゆゑにて、ゆるさざりければ、たゞひとりいでて行けるに、やうくその国までか、ぐりつきにけり。(二五 一四四頁)

(3) ある説経師の、請用して、ことにめでたくたふとく説法せむとしけるに、(五一 一六六頁)

例(2)(3)はいずれも有情物の「将然」を表す用法である。例(2)は、「その後、この女が男を訪ねようとしたが、「の意と解され、「ししたかった」という希望表現の用法に近い心理的な意志・願望の意味を表す。例(3)は、「ある説法師が、招かれて、立派に威厳をもって説法しようとした時に、「の意と解され、この「ししようとする時」の用例は例(2)の心理的な意志・願望と対比し、より動作・状態の移行の意を表すものであり、ニュアンス的に例(2)と差が感じられる。

次に、「タマへ」の用法を見よう。

本書には、「タマへ」は一例見られる。「タマへ」はもともと敬語「タマフ」の命令形で一般的に命令表現に用いられる。しかし、神仏や為政者に対して相手の行動に関係せずに話し手の希望を表現する意味で命令表現というより希望表現の用法と見るものがある。

(4)「紫式部なり。そらごとをのみおほくしあつめて、人の心をまどはすゆゑに、地獄におちて、苦をうくる事、いとたへがたし。源氏の物語の名を具して、なもあみだ仏といふ哥を、巻ごとに人々によませて、わがくるしみをとぶひたまへ」といひければ、

(三八 一五六頁)

例(4)における「とぶひたまへ」は諸本「とふらひたまへ」とあるにすがい、「私の苦しみを慰めてほしい。」と祈願する意と解され、他の人々に対する祈願として「希求」<sup>(7)</sup>を直接「表出」<sup>(8)</sup>する用法であると解釈する。

## 2、「望ム」「祈ル」の用法

本書には、希望表現と認められる動詞「望ム」が二例、「祈ル」が三例

今物語における希望表現について

見られる。希望表現として同時代の他の資料によく用いられる「欲」「願」「乞」「求」などは見られない。

まず、「望ム」の用法を見よう。

(5)後拾遺をえらばれける時、(略)えらぶ人のもとに行て、「此哥いらむ」と望けるに、

(四一 一五九頁)

(6)小侍従が子に法橋実賢といふ者ありけり。いかなりける事にか、世の人これを、ひきがへるといふ名をつけたりける。法眼を望申て、

(四九 一六五頁)

例(5)は、「この和歌が入ってほしい」と望んだが、「法眼」という僧位を望んで、「の意と解され、いずれも実動詞用法である。

次に、「祈ル」の用法を見よう。

(7)「この定ならば、臨終のさまたげにも成なむず。いそぎいのるべきぞ」とていのられけり。

(三六 一五四頁)

(8)ある時に、「念仏にて祈てみむ」とて、蓮花谷のひじり三四十人ばかりめぐりゐて、

(三六 一五四頁)

例(7)は、「『はやく祈るべきだ。』と言って祈った。」の意、例(8)は、「念仏して祈ってみよう。」の意と解され、いずれも実動詞用法である。因みに、本書において「望ム」「祈ル」には「のぞみ」「いのり」といった名詞用法は見られない。

## 3、「ム」「マウシ」「タシ」「バヤ」「ナン」の用法

本書には、助動詞「ム」が一例、「マウシ」が一例、「タシ」が二例、終助詞「バヤ」が一例、「ナン」が一例見られる。これらが本書における希望表現の中心的な表現であるといえる。

まず、「ム」の用法を見よう。「ム」はいわゆる推量の助動詞であり、基本的な用法は意志・推量・勧誘を表すが、文脈によっては希望表現と解釈することができよう。

(9) 後拾遺をえらばれける時、(略)えらぶ人のもとに行て、「此哥いらむ」と望けるに、  
(四一 一五九頁)

例(9)は、「この和歌が入ってほしい。」の意と解され、相手に対して婉曲的に希望をすると解し、「希求」を直接「表出」する用法であると解することができる。

次に、「マウシ」の用法を見よう。助動詞「マウシ」は希望の助動詞「マホシ」の対義語である「憂し」の派生語として、「ししたくない」「気が進まない」の意を表す。

(10) ちるもうし散しく庭もはかまうし花に物おもふ春のこのもり

(四五 一六二頁)

例(10)における「マウシ」は和歌における用例であり、「花の散り敷いた庭を掃きたくない。」の意と解され、「掃くのもつらい、掃きたくない。」という否定的に「願望」を直接「表出」する用法であると解する。

次に、「タシ」の用法を見よう。

(11) ある説経師の、請用して、ことにめでたくたふとく説法せむしけるに、はこのしたかりければ、事いそがしく成てよろづいそぎて、布施もとりとらずかへりて、  
(五一 一六六頁)

(12) その吹ふの日、又人によばれて説経しけるほどに、又はこのしたかりけるを、すかしてむとおもひて、すこしるなほなほる様にしければ、  
(五二 一六六頁)

例(11)(12)は、ともに「はこ(箱)をする」を婉曲的な表現であるととらえ、「厠に行きたかった」の意と解し、「願望」を「説明」する用法であると考える。

次に、「バヤ」の用法を見よう。

(13) 法のはしの下に年ふるひきがへるいまひとあがりとびあがらばや  
(四九 一六五頁)

例(13)は、和歌における用例であり、「もうひとつ上の僧位に飛び上がりたい。」の意と解され、希望表現の下位分類の「願望」を直接「表出」する用法である。

次に、「ナン」の用法を見よう。

(14) きりつぽにまよはんやみもはるばかりなもあみだ仏とつねにいはん  
(三八 一五六頁)

例(14)も和歌における用例であり、夢の中で紫式部が、「南無阿弥陀仏と常に唱えてほしい。」と他人に願う表現と解され、他者に対する「希求」を直接「表出」する用法であると解せられる。

#### 四、おわりに

以上、今物語における希望表現について考察してきた。今物語における希望表現の構成形式は単純であり、その用例数も少ない。これは今物語の分量、内容、文体に起因するものと考えられる。

各形式の用法について見ると、「〜ントオボス」は「願望」を「説明」する用法であり、「〜ムトス」は本来有情物の「将然」を表す用法であるが、希望表現と関連性がある用法である。「〜タマヘ」は形式上は命令表現であるが、文脈からは希望表現の下位分類の「希求」を「表出」する用法である。動詞「望ム」「祈ル」は名詞用法が見られず、すべて実動詞用法である。助動詞「ム」は相手に対する「希求」を「表出」し、「マウシ」は否定的な希望表現として「願望」を「表出」し、「タシ」は「願望」を「説明」する用法である。終助詞「バヤ」は「願望」を「表出」し、「ナム」は「希求」を「表出」する用法である。

総じて言えば、今物語における希望表現の構成形式は単純なものであり、その用法も和文的な限られたものである。希望の心理に基づいた動作を表す動詞用法と内心の希望を「表出」する用法があるが、希望の名詞化用法を表す「欲」「願」、名詞用法の「のぞみ」「いのり」などが用いられないことが本書の特徴と言えよう。

#### 【注】

- (1) 柴田昭二、連仲友「希望表現の通史的研究序説」『香川大学教育学部研究報告第一部第109号』平成12年3月
- (2) ここでいう希望表現とは、人の願望に関する、一種の心情的表現形式

である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の間接的や過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかつた」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大辞典』第一巻 岩波書店 一九八三年一〇月第一刷発行

(4) 『今物語・隆房集・東斎随筆』久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江

校注 中世の文学第二期・第七回配本 三弥井書店 昭和五四年五月

(5) 希望表現の下位分類については(注2)参照。

(6) 注(2)参照。

(7) 注(2)参照。

(8) 注(2)参照。

(しばたしょうじ)

香川大学名誉教授

(れんちゆうゆう)

広島市立大学客員研究員

(二〇一六年一月三〇日受理)